優秀賞

出会いに感謝を

京都市立西京高等学校一年（京都府）
谷　吏佳子

人とのコミュニケーションが減ってしまったコロナ禍において、私は茶道を通じて新たに得たものがある。家族の団らんの場。

私が茶道というものに触れ始めたのは、今年の四月。高校に入学し、不安と期待でいっぱいの中、部活体験で茶道部の体験に行ってみることにした。私は中学の時、剣道部に所属していたが、最後まで続けられなかったという苦い経験がある。だからこそ高校では、絶対、最後まで続けたい、そんな思いがあった。体験で教えてくださった先輩方の温かい雰囲気、そしてお茶室に、心を惹かれて私は茶道部に入部することを決めた。部活が楽しくて、部活がある日は学校に行きたくてたまらなかった。

しかし、五月に入って緊急事態宣言が発令され、部活が停止になってしまった。学校に行く楽しみが減ってしまい、その代わり、家にいる時間が多くなった。小さい頃は、よく家族みんなで遊んだなあ、と懐かしく思い返していると、あることがひらめいた。それが家族の団らんの場でもあるお茶会だ。

例年であれば、学校外のお茶会などに参加すると先輩方がおっしゃっていたが、今年はコロナの影響で行けていない。作法も全然分からなかったが、お菓子を用意して、お抹茶を点てることはできた。すごく緩いお茶会だったが、庭の紅葉が青々と茂る様子を眺めながら、家族で楽しくお話をしながら、みんなで楽しいひと時を過ごした。

それから、休みの日は、ほとんどというように家族の「なんちゃってお茶会」を開いている。部活で学んだことをお茶会に生かしたり、新たに学んだことを家族に共有したり、また、部活での様子なども話している。

去年から続くコロナ禍の社会は、しんどくて、辛かった。しかし、私がこの春に出会った茶道によって家族との新たな団らんの場を見つけることができた。

コロナはいつ終息するか分からない。それでも、茶道に出会えたというこの感謝の気持ちを忘れずに、私は三年間、最後まで部活動に励みたいと思う。